

# 「子どもの貧困」に効く児童文学

西山利佳

「子どもの貧困」問題に対して児童文学はどう関わり、どんな力を発揮しうるのか。本特集所収湯澤直美氏のインタビューと湯浅誠『どんとこい、貧困！』（理論社 09年）に得た観点を中心に考えていきたい。

## 「家族主義」が導く子どもの困難、そこからの脱出

湯澤直美氏は本特集インタビューの中で、七〇年代くらいから、日本では家族の自助努力を求める家族依存型の政策が採られてきたと話された。なるほど。そうすると、なんらかの理由で親が「面倒を見られなくなった場合」とたんに子どもは困った状況に陥るわけだ。

七〇年代終わりに、『おかしな金曜日』（偕成社 78年）で団地の一室に置き去りにされた小学生の兄弟を描いたのは国松俊英である。氏はエッセイ『おかしな金曜日』と子ども「の置き去り」（『日本児童文学』04年7-8月号）で、創作の背景と、出版後作品そっくりの事件が一度ならず実際に起こっていること、そしてその一つを題材に撮られた映画

「誰も知らない」（是枝裕和監督）についても言及している。『おかしな金曜日』では、父親が蒸発した一年後に母親が蒸発して、小学五年と一年の兄弟が残される。九五年に出版されたあかねるつの『たにんどんぶり』（講談社）では、小学四年生の康平が母親から置き去りにされる。父親は康平が生まれてすぐに車の事故で亡くなっている。これは、「子どもの貧困」が語られるときに同時に浮上する「母子家庭」の困難とつながっているはずだ。

個々バラバラにされた団地を舞台に、地域共同体というセーフティネットが機能していない状況下、家族というセーフティネットも崩壊したとき、子どもがさらされる困難を、三〇年以上も前に作品化した『おかしな金曜日』はやはり特筆に値する作品だ。

『たにんどんぶり』はその題名が端的に示しているように、血のつながった親子至上主義に真っ向から異議申し立てを突きつけている。康平は「いま、ぼくがママをすててやる！」と一旦は迎いに現れた母親を捨てることを選ぶのだ。そし